

その結果をみると、授乳については、やはり母乳栄養群の母親の方が他の群の母親より授乳を楽しいものとしてとらえているといえる。また、母乳栄養、混合栄養、人工栄養のいずれの場合にも、乳の飲み具合については半数以上の母親が非常に気にしており、比較的ゆったりした態度でいるものは10～20%の母親で、栄養方法別にみると母乳栄養群の母親がやや多い。また、育児について不安が生じたときの解決法をみると、育児書依存のものが多いことが分かる。

夫の育児への関心度や協力の度合についてみると、関心があり協力的なものは60～70%であり、母乳栄養群の父親の方に、やや多い傾向がみとめられる。

母乳に関する指導を受けたことの有無についてみると、受けたことがないとするものが1/3あり、受けたものの場所のほとんど全てが出生した場所である。

人工栄養の指導については、やはり混合・人工栄養群に受けたものが多く、母乳栄養群では20%前後であるのに比し、混合・人工栄養群の場合は30～50%のものが出生した場所で指導を受けている。最も多いのは、混合栄養1カ月持続群であった。

#### 文 献

- 1) 高石昌弘：乳幼児身体発育パーセントイル曲線，小児保健研究，35(5)：337～340，1977
- 2) 高野 陽・藤村京子・宮崎 叶・松島富之助：乳幼児身体発育状況——定期的な保健指導受診児について——，小児保健研究，31(6)：277～281，1973
- 3) 宮崎 叶・松島富之助・内藤寿七郎・栄養別乳児身体発育の分析調査研究，小児保健研究，23(4)：155～166，1965

## 母乳栄養児と人工栄養児の身体発育比較

|       |            |       |
|-------|------------|-------|
| 分担研究者 | (国立公衆衛生院)  | 高石 昌弘 |
| 調査協力者 | (大妻女子大学)   | 八倉巻和子 |
|       | (国立公衆衛生院)  | 神岡 英機 |
|       | ( 同 上 )    | 大森世都子 |
|       | (東京都立築地産院) | 藤井 とし |

### 1. 目 的

母乳栄養と人工栄養によって、乳児の身体的発育にどのような相違があるかを調べた。

### 2. 対 象

昭和49年1月から同年12月までの一年間に、東京都立築地産院にて出生した約1,300例のうち生後一年間健康診査を受けた健康児を対象とした。ただし、妊娠中および分娩時に異常の

あったもの、出生時体重が昭和45年の乳幼児身体発育調査結果より算出されたパーセンタイル値で25Pから75Pをはずれるもの、生後6カ月未満で3カ月以上および生後6カ月から12カ月まで4カ月以上来院しないものなどは除外した。これらの条件に合ったものは最終的に170例となった(表1)。なお、出生時体重のパーセンタイル値で25Pおよび75Pは男では2.97Kgおよび3.53Kg、女子では2.85Kgおよび3.44Kgである。

表1.

|       | 男  | 女  | 計   |
|-------|----|----|-----|
| 母乳栄養児 | 44 | 53 | 97  |
| 人工栄養児 | 40 | 33 | 73  |
| 計     | 84 | 86 | 170 |

### 3. 方法

母乳栄養と人工栄養の別は、生後6カ月までに完全に母乳栄養か人工栄養かによって区別した。ただし、生後数日間混合栄養で以後母乳のみのものは母乳栄養群に入れた。

出生時から生後12カ月まで、各月ごとの実測値および来院しなかった月の補間値より平均値を求め、さらに3カ月ごとに移動平均して平滑化した値を求めた。

### 4. 結果

体重についてみると、出生時平均体重が男では母乳栄養群3,268g、人工栄養群3,228g、女では母乳栄養群3,166g、人工栄養群3,137gで殆んど等しく、これを生後12カ月目の発育値でみると、男ではあまり差がなく(母乳栄養群9,699g、人工栄養群9,677g)、女では人工栄養群(9,481g)が母乳栄養群(9,107g)より大きかった。

身長についてみると、出生時平均身長が男では母乳栄養群50.35cm、人工栄養群50.09cm、女では母乳栄養群49.68cm、人工栄養群49.65cmで殆んど等しく、これを生後12カ月目の発育値をみると、男では母乳栄養群75.02cm、人工栄養群76.12cmで1.10cmの差があり、女では母乳栄養群(74.20cm)と人工栄養群(74.05cm)の間に殆んど差がなかった。

カウプ指数でみると、男では人工栄養群より母乳栄養群が、女では母乳栄養群より人工栄養群がそれぞれ大きい値を示した。

## 栄養法と初期体重減少の関係について

研究協力者 (国立公衆衛生院) 高野 陽

新生児期の初期体重減少は正常な経過をとったものでは出生体重の10%以内といわれている。しかし、新生児の栄養法によってはその体重減少の程度に差が生ずるといふ報告もある。そこで早期新生児期(主として新生児室入院期間中)の体重の変動を母乳栄養(分泌不十分な場合には5%糖液を与える)児を対象に調査した。

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

## 1. 目的

母乳栄養と人工栄養によって、乳児の身体的発育にどのような相違があるかを調べた。

## 2. 対象

昭和49年1月から同年12月までの一年間に、東京都立築地産院にて出生した約1,300例のうち生後一年間健康診査を受けた健康児を対象とした。